
私の名を呼ぶまで

剣崎月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の名を呼ぶまで

【Nコード】

N3763Z

【作者名】

剣崎月

【あらすじ】

とんでもない理由で皇子と結婚することになった【私】冷静になった皇子は【私】の処遇に困っているようだが、理由が理由なので優しくして差し上げるつもりはない……さて？ 【私】はどうなるのだろう。

「01」アメリカ、イザベル、シャーロット

「アメリカ、用意はできたか？」

用意はできておりますが、私の名前はアメリカではありません。
皇子にとってはどうでも良いことでしょうかね。

私は小さな国の王女さまに仕えていた。小間使いなどの傍仕えではなく、掃除や洗濯などの力仕事を任されるほんとうの下っ端。

私が仕えていた王女さまは、王女さまだったが目が覚めるような美女とかそういう人ではなかった。

どんな王女さまだったのか？ 側で仕えたことがないので分からないが……向こう見ずな所がある王女さまだったらしい。そのせいで私はこうして皇子の隣に立つはめになっている。

王女さまは騎士と恋仲になり、婚約が整っていた皇子との結婚を嫌い駆け落ちした。

まさかそんな事をするとは、王も思っていなかっただろう。

王女さまが駆け落ちするとき、私はたまたまその場に居合わせてしまい、騎士に殴られて失神した。仮にも騎士がか弱い下働きを殴るとは……。

殺されなかっただけありがたいと考えるべきか 手足を縛られ猿ぐつわを嚙まされて、暗がり目覚めた時にまずそう考えて自分を慰めた。

王女さまと騎士が駆け落ちしたのは、皇子が王女さまを妃として迎えにくる前日。

大国の皇子が王女さまを迎えに来たのは、王女さまに興味を持っていたからではなく、別の用事があった、たまたま帰り道に王女さまがいるので連れていくことになっていたのだそうだ。

私は暗がりです”誰か助けて”と考えながら唸る。そこにやってきたのが皇子が連れてきた王女さま付きの侍女。その侍女に助けられ、「どうしてこのような所に？」

当然の質問をされたので、ことの経緯を告げた。

その時私は、王女さまが騎士と駆け落ちしたことを知らなかった。最後の逢瀬くらいに考えていた。それはそうだろう、王女さまが嫁ぐ先は大国で、下手な行動をとれば国が危ないことくらい私でも分かる。

分かっているはずなのに駆け落ちをしたのだ。

閉じ込められていた私は知らなかったが、王たちは王女さまの代理を立てていた。もちろん皇子には教えずに、顔や雰囲気似ている従妹の姫を王女ということにして。

皇子は王女さまに興味がなかったので、従妹とすぐ変わったことに気付きはしなかったらしい。まさか王が従妹とは言え、偽の王女を妃として送り出すとは思っていなかったこともある。上手く誤魔化せそうだったのだが、そこに侍女が私を連れて乗り込んだ。

侍女の言葉に青くなる従妹の姫、そして王。

睨んでくる王女さまの乳母に、大臣とか、とか。

室内は緊迫し、そして私は皇子の国に身柄を拘束された。殺される恐れもあるから……とのこと。

結局事実が明るみに出て、皇子は激怒した。

王が謀ったことを怒ったのか、王女が駆け落ちしたことを怒ったのか？ 侍女は皇子が怒った理由は王が謀ったからだと言った。

王女が駆け落ちしたことを正直に告げ、その上で従妹の姫を「従妹の姫」として紹介し、妃にするように勧めたら皇子は怒らなかつた。

王は娘である王女が駆け落ちしたことに激怒したと考えていたらしい。

皇子のプライドに傷をつけたと。両方だったのかもしれない。ともかく怒った皇子と、怒りを鎮めて欲しい王。そして皇子は常軌を逸した行動をとった。

「イザベルを妃として迎える！」

イザベルって誰やねん？ と思ったのだが、皇子の指は私を示していた。よくよく考えたら、あの場の下働きの私が連れていかれた時点でおかしいわけだ。

王としては下働き一人で皇子の怒りが収まるのならば安いというか……拒否できる立場ではないので私は皇子の妃になることが決定した。

国民は驚いていた。私だって驚いている。結婚するのは王女さまだと誰もが思っていたのだから。驚きと情報不足からひどい噂が立った……皇子の国に到着してから知った。

皇子が私に一目惚れをし、様々な苦難を乗り越えて国へと自ら迎えにきた と。

この残念過ぎる容姿の私に大国の美貌の皇子が恋したとか……信用されないだろうと思っただが、そういう話が好きな人が一定数いるようで、その一定数に非常に声が大きい人たちが含まれていたらしく、皇子が恋した町娘という不思議なポジションに収まることになってしまった。

私は非常に普通の顔立ちをしている。

どのくらい普通の顔立ちをしているかというと、

「シャーロット」

皇子が名前を覚えられないくらいに普通の顔立ちである。隣にいるあの時助けてくれた侍女が曖昧な表情をする。

彼女、最初の頃は「皇子もすぐに名前を覚えますので」「皇子は名前を覚えるのが苦手で」とフオーローしていたのだが、さすがにそれも言えなくなる程に皇子は私の名を間違っ。

覚えて欲しいと思ったことはないのだが、覚えないと彼女の胃にきそつだなと思うのでできることなら覚えて欲しい。

私から積極的に動くつもりはないが。

皇子は私と会話することはない。一方的に告げて立ち去る。

共通の話題もない私にとってはありがたい。私は隣国の皇子のことなど詳しく知らない。名前すら知らなかったくらいだ。

いま私が皇子について知っていることと言えば、皇子には兄と弟がいる。この三人兄弟と従兄弟の公子さんの四名の誰かが次の皇帝になる。最有力候補が皇子なのだ。

侍女は、

「皇子が皇帝に立った暁には、皇后ですよ」

言われるが、なりたくはない。

だが残念なことに私は皇子の正式な妃である。

どうも本当は違う人が正式な妃にしようとしていたらしいのだが、あの騒ぎでこの状況。皇子が正式な妃にしようとしていた女性は、側室の誰かだった……らしい。

伝聞ばかりなので”らしい”が続くが、詳しく知ったところでどうにもならないので”らしい”だけで充分。

どうしようもない理由で皇子の妃となった私、そして皇子には側室がたくさんいる。側室には私の故国よりもずっと大きな国の姫さまもいる。

「どうしてあなたみたいなの、普通の娘が妃に選ばれたのかしら」

”それは憤怒を拗らせた結果です”とも言えないので、私は黙っ

て俯く。泣いているのではなく、笑いたくなる気持ちを抑えるために。

大国の姫さまからはわざわざ足を運んで嫌味を言ってもらえるくらいには嫌われている。私は正妃で、皇子の妃のなかではもっとも身分が高いので、大国の姫さまが出向かなければ会うこともないの
で、こつこつ頑張ってやって来てくださる。

生産的なことに時間を費やしたらいかがですか？ 思うが、側室の生産的なこととは、夜のお勤めだけで、あとは消費行動のみだ。

高い陶器のティーセットに、紅茶の葉に、小麦粉と砂糖と卵で練成した毎回違う菓子に、果物と砂糖を鍋にぶちこんでとるととると煮てかき混ぜたものなど。

私、紅茶より珈琲のほうが好きなんですけれどね。

大国の姫さまが嫌味のつもりで言っている台詞は、皇子からも聞いている。

「あの時自分はどうにかしていた」

言わなくてもいいです。それは私も侍女も思っていることですから。

「02」 シュザンナ

皇子が冷静になっても周囲はなかなか冷静にはなれないようです。でも周囲を責めることはできませんよね。悪いのは皇子ですから。

「シュザンナ」

シュザンナって誰やね？

「お前の故国から側室がやってくる」

……どうやら私のことのようにです。まあ皇子がこの部屋で話しかけるのは私か侍女だけで、侍女はシュザンナではないので私以外はありえないのですが、呼ばれていると気付けないので「？」となり、口を挟む機会を失う。

それにしても私の名前、そんなに覚え辛い名前じゃないんですけれど……皇子に覚えて欲しいと思いはしないので、それはそれで良いのですが。

故国からやってくるのは従妹の姫。王女さまの代役に選ばれた方がやってくるとか。

従妹の姫さまにこの地位を譲れと？ それは良いですねと思ったのですが、どうやらそうではなさそうでした。

ただ来ることを教えただけ。そして部屋を出て行きます。皇子の思うところが分からないので私は黙って見送りです。

することがない暇な私は、後宮を観察するのが日課になりつつあります。側室の方々の生活を見ると、とても真面目。

どの側室も読書家でいらしゃって、宝石よりもドレスよりも本のほうが良いのだそう。舞踏会など開かれず、皆実家で政治などの学問を教え込まれ、贅沢は敵だと育てられ。後宮って想像よりもずっと地味だなと呟くと、

「一時期流行ったんですよ」

侍女が笑いながら教えてくれた。

ここ五十年くらい王の心を射止める女性は「小国の姫。女騎士。侍女。取り立てて美人ではない。読書好き。派手な物には興味がない。質素儉約。控え目あるいは男勝り。剣が使える。知性派」そして何より重要なのは【皇后になるつもりなんてありません】という態度なのだそうだ。

貴族や王族も馬鹿ではないので、ならば王の心を射止めるために娘を「そのように」育ててるとして……結果、後宮は下手をすると下町よりもぼそぼそした感じになっている。

全体として地味。私の故郷よりも地味。

だって誰一人としてお茶会なんて開かず、ただ黙々と土いじりをしたり、本を読んだり……ここは修道院ですか？ と言いたくなるような静けさ。

侍女も以前は一人に十数名つけられていたのだが、質素を尊び気付いたら一人に一人。

物語に登場するような華やかな世界ではない。

私の所にわざわざ嫌味を言いに来た大国の姫はかなり浮いている模様だ。こんなぼそぼそとした所で気を張っていると思うと少し労りたくなるので、私は今日も大国の姫から悪口を黙って聞く。

私の名前をしっかりと覚えている大国の姫の悪口を聞きながら思ったことは、皇子のお母さまも地味な人だったのかなあ？

大国の姫が帰ってから、侍女から流行りの「選ばれる女性」について、詳しく聞いてみた。

「お妃さまは”沿った”御方ですよ。元侍女ですし……」

私は元侍女で取り立てて美人じゃないものね。言葉を濁したことについては聞かなかったことにしておく。

そうか私と皇子の噂が広まったのは、流行りに沿っていたからなんだ。世の中の夢見る少女にとっては歓迎するべきことなのかもしれないが、私にとっては迷惑な風潮だ。

ついでと言っては駄目なのだろうけれども、皇子の生母も”沿った”人だったのかと尋ねたところ、

「お美しい方だったそうです。美貌を王が認めて側室に」

おや？ 綺麗なのか。

だがどうやら美人は三日で飽きるを王が地でやってしまったようで、連れてきて数度手を出してあとは放置、そして生まれたのが皇子。

「美人はいつも平凡顔を恐れています」

なんとも大変なことだ。貴族さまたちの世界がそんなことになっていたとは知らなかった。

……でも、何となく解った。王女さまが側室の一人になれたのは、顔が普通で小国の姫だったからだ！ なんと失礼な……失礼なのは私か。

パーティーが開かれ私も出席することに。その会場にいたのは、これもまた地味なご夫人方だった。どの方も知的さを前面に出し、数名は男装していたりと……。

私一人だけの凄い豪華なドレスで、目立って仕方がなかった。

そうか王が地味目な普通顔で真面目を選ぶから、家臣もそれにならってこうなるんだ。恐いなあ。

その会場で一人すごく綺麗な女性を見かけた。

他のご夫人方のようにシンプルな地味な色のドレスを着て壁際に立っている方。綺麗な黒髪に白い肌に、銀色のこれもシンプルなネックレスが映えて、本当に美人だった。

パーティーが終了し部屋へと戻ってから侍女に、あの人は誰かと尋ねたら侯爵令嬢なのだそうだが……綺麗なので嫁の貰い手がないと。

「正確に言いますと、侯爵が”どうせ嫁いでも、後からきた身分の低い不細工に追い出されるのだからどこへも嫁がせぬ”と仰って、結婚させてもらえないそうです」

「どんだけ平凡顔の読書家質素信仰が浸透しているのだ。」

「今の所身分の低い者は美しい女性を妻にしていますが、美しい妻を見れば女を見る目がないと言われる世の中なので、出来る限り普通で地味目で散財を嫌う女性を欲しがりますね」

「そう教えてくれる侍女の顔を見る。侍女は美人と普通の間くらい。」

「後宮で良い人を見つけるのは、ちょっと難しいのかもしれない。」

「うわー見えないところでしてくださいよ、皇子」

「侍女と話を終えて寝る準備をして出窓に座って風景を見ていたら、皇子と侯爵令嬢が抱き合っている姿を発見。」

「見えるところで逢い引き中なので、かぶりつきで見させてもらいますよ皇子」

「木が生い茂って隠れるに適しているかと思っているのだろうが、私の部屋寢室からは丸見え。せつかなので下世話に窓に張り付いて二人の逢瀬を凝視する。」

「月明かりの下、美貌の男女が抱き合っている姿は絵になる。女性のほうが涙を流しながら抱きつくさまは、私が憧れた世界そのもの。二人は離れ難そうにキスをして、その場を去った。いつの間にか背後にいた侍女も私同様、窓にかぶりつき。」

「身分も家柄も問題ありませんが、美人ですからねえ」
「可哀相過ぎる。」

「なにより皇子はお妃さまを迎えたので……………侯爵は許さないでしよっ」

私が普通だから美しい侯爵令嬢では勝てないと言っことですね。
過去、どれほどの美女が地味女に敗北したのか？ 想像するだけで
怖ろしい。

皇子のことはまったく尊敬申し上げていない自業自得だとは思え
ど、少しだけ憐れには感じた。恋した相手が美人だから妻に出来な
いだなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3763z/>

私の名を呼ぶまで

2011年12月14日12時49分発行